

中国のほんの話(68)

揖斐高『遊人の抒情 柏木如亭』

～ 江戸時代の漢詩ブーム ～

蔭山達弥



近代以前は、どの文明国も、三層構造の言語文化をもっていた。封建時代の日本でも、言語文化は三層構造だった。上流知識階級である公家や寺家、学者は、純正漢文の読み書きができた。中流実務階級たる武家や百姓町人の上層は、日本語風にくずした変体漢文を交えた文体「候文」を常用した。下層階級は無筆（文字の読み書きができないこと）が多かった。

江戸時代は、日本史上、初めて文字文化が庶民にまで行き渡った時代であった。室町時代までは、漢籍の読者人口は、足利学校や、五山の僧侶など一部に限られていた。漢籍の出版も、江戸初期までは直江兼統や徳川家康など「上からの出版事業」であった。しかし、江戸中期からは、武士や町人も、教養として漢籍を読むようになり、民間の営業ベースで漢籍が出版されるようになった。江戸時代の漢文ブームを定着させたのは、五代将軍徳川綱吉（1646～1709）である。実際、綱吉は歴代で最も儒学を好んだ将軍で、家来を集めて漢籍の講義をしたほどだった。綱吉が始めた文治主義の結果、新井白石、室鳩巢、荻生徂徠、雨森芳洲など優秀な漢学者が次々と世に出て、江戸中期以降の世論形成や政治の運営にも一定の影響を与えるようになった。（以上、加藤徹『漢文の素養』光文社新書242より）

将軍綱吉の逝去から54年後の宝暦13年（1763）、江戸の町に放浪詩人柏木如亭は生まれた。柏木家は代々幕府の小普請方大工棟梁職をつとめる家柄だった。如亭は早い時期に父母に死別し、そのために心細い思いをしたらしい。そして弟が一人いた。自筆本『如亭山人題跋』には亡き父について「先の棟梁満室院在りし日、職任の暇、好んで翰墨を弄ぶ。」と書かれている。翰墨の嗜みがあった父の血を受け継いだ如亭は、安永8年（1779）年に昌平黌の啓事役に就いた平沢旭山に入門して漢文を学んだ。しかし、如亭の修学に、より大きな影響を与え、如亭を詩人として自立する方向に導いたのは市河寛斎であった。市河寛斎は平沢旭山の後輩にあたる儒者で、旭山が漢文を能くしたのに対し、寛斎は漢詩を得意にし、如亭は寛斎から寛斎から漢詩の読み方や作り方の本格的な手ほどきを受けた。

天明7年（1787）、25歳の時、如亭は聖堂啓事役を辞職した市河寛斎が結成した江湖詩社に参加した。18世紀に入って日本漢詩の詩風は、盛唐詩あるいはそれを模倣した明詩を手本とする

格調派の詩風に大きく傾いていたが、江戸詩壇の現実主義的な詩風への転換は、寛斎の率いる江湖詩社によって推進された。如亭は革新的な江湖詩社の活動にもっとも早い時期から参加し、その前衛として革新運動に携わる過程で詩人としての自己形成を行ってきた。如亭の初めての刊行詩集『木工集』に収められている「立春」という詩、「晩来随例了郷讎 無意新題入酔哦 坐著剛知驅鬼緊 心頭誤走旧詩魔」（晩来例に随ひて郷讎をおふ 新題をもて酔哦に入るに意無し 坐著してまさを知る 鬼を驅るのきびしきに 心頭誤って走らす 旧詩魔）「旧詩魔」は節分の夜に豆を撒いて鬼を追い払う行事。邪鬼を追い払うことには成功したが、代わりにしばらく鳴りをひそめていた身内の「旧詩魔」を目覚めさせてしまった。「詩魔」すなわち如亭の詩心は、如亭でさえ統御できない魔性のもので存在し始めていた。如亭は袁中郎の説く、真の詩は古典を模倣するところからは生まれず、個々の詩人の心の働きに拠るべきであるとする、現実的な性霊説の詩論に拠りながら、江戸市民の日常的小世界における、みずからの心の捉えがたさや気分の揺れを見つめ、それを正面から詩の主題にしようと心がけたのである。性霊派の詩が江戸詩壇の主流になると、漢詩の大衆化はいっそう加速した。

以上、揖斐高の「柏木如亭論」である『遊人の抒情 柏木如亭』（岩波書店2000）から、かつてはごく一部の愛好者以外にほとんど知られることのない、近年ようやく評価の気運もみられる江戸時代の一漢詩人の青年時代を紹介し、漢詩がいかにか当時の人々の間に浸透していったかを垣間見た。

江戸時代の漢詩の隆盛については、同じ揖斐高執筆になる『漢詩の隆盛』（『岩波講座日本文学史第10巻19世紀の文学』岩波書店1996）を読まねばならない。

かげやま たつや（非常勤講師・中国文学）